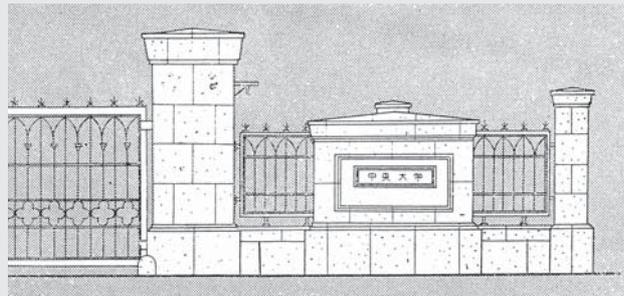


白門の由来



白門の完成予定図

「白門」は本学を象徴する言葉である。しかし、創立時から使われていたわけではない。創刊されたばかりの『中央大学新聞』の第3号（1929年5月）が「白門の使命をして万国的にいやが上に重からしむべく」云々と「白門」に注意をうながす傍点を付して使っているのが一番早い時期のもののようなのである。また同紙は次の号で投書欄「白門の声」を設けたり、また「我が白門の使命」と文中に使うなど、このころから学生の間で積極的に使われはじめたらしいことがうかがえる。

戦後、大学祭を「白門祭」と呼ぶようになった57年10月25日発行の『中央大学新聞』に、「『白門』名称の由来」という大久保次夫（総務課調査室長・当時）の寄稿文が掲載されている。それによれば「白門」は、28年に政治学会と辞達学会が共催で募集した「学生歌」に採用された「聴け白門の暁を、聴堂に鐘鳴り出ずる……」という歌詞に由来するものだという。作詞者は当の大久保で、東大の赤門だけでなく、早大の稲門、日大の桜門などがあって、大学のシンボルだった白い徽章にヒントを得て「白門」とひねり出したものだという。決して東大への対抗意識から作りだしたものではない、とは大久保の弁である。なお、それまでなかった中央大学の正式な「白門」は、59年に聖橋通りに面して、白御影石で正門として建てられた。